

いま、 若い人と読む 『資本論』

現代的探究の旅に出發！



石川康宏さんに聞く
神戸女学院大学名誉教授 いしかわ・やすひろ



とかしくみの是正が必要じゃないか——そういう思いが広まっているのだと思います。そしてその中に、その手の問題を考えるにはマルクスがいっぱいいい、『資本論』がいっぱいいいという声も含まれているということでしょう。

若いみなさんには、カール・マルクスという名前や『資本論』という本の名前になじみがないという人も多いでしょう。でも、おじさん、おばさん世代には、マルクスはかなり知られた人でした。今年65歳のほうが、18歳で京都の大学に入学した時、学内の生協書籍部に『資本論』は山積みになって売られていましたから。マルクスの人気、不人気をめぐる歴史にも、資本主義とくに新自由主義の肯定派とその是正を求める修正派や否定派の力関係の変化があらわれています。それもまた資本主義とはどういう社会かを考えさせる重要な材料になってくれますから、機会を見つけてぜひ勉強してください。

■「関心は変革の運動論やポスト資本主義論に」■

リーマン・ショックが起こった2008年、マルクスに對する注目の焦点は「経済危機のことはマルクスに聞け」と、もっぱら資本主義の経済論にあてられました。しかし、いまその範囲は社会変革論やポスト資本主義（コミュニケーションズム）論にまで広がっています。それだけ社会のゆきづまりが深まっているということでしょう。

マルクスの変革論は、ある日突然労働者が蜂起して、社

資本主義の行き詰まりが誰の目にも明らかになり、マルクスの理論、とりわけ『資本論』への関心が広がっています。ただし、この大著に、ためらう方も多いと思います。若い方との『資本論』読書会にも参加している石川さんに、『資本論』とはどういう文献か、今日の課題との関わりなど、お聞きします。（編集部）

1 マルクス「その人の言葉」を聞こう

■「個人の努力では解決できない困難が」■

マルクスへの関心が高まっていますね。背景にあるのは、ぼくたちが生きている社会のあり方そのものの疑問や不安の広がりだろうと思います。「このままでは生きられない」というある種の危機意識ですね。個人のがんばりでは乗り越えられない「社会問題」に、ぼくたちはいくつも直面していますから。貧困と格差、気候危機の深刻化、ジェンダー不平等や性暴力、コロナ・パンデミックであらわになった医療・保健体制の手うすさや日本政府の指導力のなさ、どれもこれも自己努力だけで解決できるものではありません。これらの解決には、もっと大きな社会の構造

会の混乱に紛れて権力を手にするといった空想的なものではありません。今でいえば、毎回の選挙にどう取り組むか、日々の市民運動をどう進めるかなどに直結するきわめて現実的で具体的なものでした。それはよく考えてみるべき深みを今も持っています。その点について、ぼくは昨年こう書きました。

「資本主義を超える社会への関心が高まっています。それに応じて、目前の困難を乗り越える一歩一歩の前進こそが、①新しい社会の内実を明らかにし、②それを目指す人々の輪を広げ、③その社会を担う人間の能力を育むという変革論のリアリティーを、マルクス『本人の言葉』から正しくくみ取ることの必要も増しています」（しんぶん赤旗）2021年8月29日付）。

マルクスはいま足したのですが、これら三つの課題での着実な前進に、一挙に資本主義を乗り越えることはできません。願望ではなく現実を、空想ではなく科学の目を——ぜひみなさんもマルクスといっしょに資本主義のしぐみをさぐる旅を試みましょう。

2 資本のもうけはどこから？

【第1部「資本の生産過程」のあらすじ】

以下、マルクスが生涯をかけて残した『資本論』を紹介していきます。ある部分を取り出して、あるいは突っ込ん

で紹介する本や論文はたくさんありますので、ここでは分厚い『資本論』3部の全体を、ギュッと圧縮して示してみます。あくまで石川流のまとめですが、長い『資本論』を読む上での一つの見取り図にしてください。

■「なぜ資本の生産過程からなのか」■

まず、第1部「資本の生産過程」は、囲みのように組み立てられています。

第1篇	商品と貨幣
第2篇	貨幣の資本への転化
第3篇	絶対的剰余価値の生産
第4篇	相対的剰余価値の生産
第5篇	絶対的および相対的剰余価値の生産
第6篇	労賃
第7篇	資本の蓄積過程

いかにもややこしそうな言葉がならんでいます。第1部は資本の運動を生産過程にしほって検討しています。

なぜ資本主義の運動でなく資本の運動なのか。それは個別の資本、個々の資本によるもうけの追求こそが資本主義経済の根本的な原動力になっているからです。資本主義全体の究明には、まず個々の資本の運動を究明せねばならない、だから個別資本を分析するんだという事です。では、なぜ資本の運動の流通や消費などではなく生産の部分に焦点をあてるのか。それはこれから説明されていくことです。生産こそ資本がもうけを生み出す現場になっているからです。

円の商品は1000円で、つまり誰にも等しく価値どおりにものが販売される商品・貨幣経済の原則（等価交換の原則）の上で、資本はどうやってもうけを手に入れるのか——その問題が分析されます。資本も機械や部品や労働力を価値どおりに購入し、生産した商品たとえばクルマを価値どおりに販売します。それにもかかわらず、資本はもうけをたくわえます。

この謎を解くカギは労働力という商品の特別な性格にあります。1000円で買った部品はクルマの中に組み込まれても1000円ですが、たとえば月20万円で買われた労働力は、たとえば月40万円の価値を生み出します。この世でただ一つ、労働力には自分の価値を超えて新しい価値を生み出す性質があるのです。この二つの価値の量の差をマルクスは「剰余価値」と名づけます。それは資本が労働者による労働の成果から、対価の支払いなしに手に入れる部分のことです。こうして資本は、等価交換の原則を侵害することなしに、逆に商品・貨幣経済を世界に広めることで自身のもうけを増やすことができたのです。

■「剰余価値を生む方法、労働者の抵抗」■

つづく、第3・4・5篇は「剰余価値」を大きくするために、資本がとる様々な行動の分析です。人間が生きるために必要なものを生産するには、労働対象（自然あるいはすでに人の手が入った原料）、労働手段（対象にはたら

■「等価交換を侵害しないで資本はもうける」■

第1篇から順に見ていきます。第1篇は資本ではなく「商品と貨幣」を検討します。生産を行うために資本は機械や原材料を買い、後には生産物を売らねばなりません。それを買ったり売ったりできるのは、それらがすでに商品だからです。そして頻繁な売り買いには貨幣が不可欠です。そうやって資本の運動は、商品経済や貨幣経済を内にふくみ、その上に初めて成り立ちます。だから、資本を分析するのに不可欠な作業として、まず商品とは何か、貨幣とは何かが検討されるのです。

商品は価値と使用価値という二つの要因から成っています。「使用価値」というのは人の欲求を何らかの形で満たす性質、「価値」というのはその生産に必要な抽象的人間労働が堆積しているという性質です。その堆積の量に応じて、商品と商品の交換の割合が決まっています。100円のボールペンと1000円のアイスクリームの価値が等しいのは、その生産に共通に必要なとされる抽象的人間労働の量が等しいからです。貨幣はもっぱらそれら商品の価値をはかる商品で、価値を貨幣で表したものが価格です。商品も貨幣も人がつくったもののなのに、資本主義ではどうして人が商品や貨幣にふりまわされるようになるのかといった物神性の問題も取り上げられます。

第2篇では、1000円の商品は1000円で、1000

きかける道具や機械）、労働そのものが必要で、マルクスは労働対象と労働手段を一括して生産手段とも呼んでいます。これら三つの要素で成り立つ生産過程が、資本主義では同時に剰余価値の生産過程となっています。マルクスはここで、機械や部品や原料などに投じられる資本の部分を生産の中でも価値の量を変えない「不変資本」、生産過程でより大きな価値を生んで量を変える労働力を「可変資本」と名づけ、その可変資本の可変の度合いを最大限に広げる資本の方法を分析します。

個々の資本は互いに競争していますが、その核心はより多くの剰余価値を手に入れるための競争です。剰余価値は労働力の価値——現に支払われている賃金——と労働力が新たに生み出す価値の差ですから、資本は一方で労働力の価値をできるだけ低くし、他方で労働力にできるだけ多くの価値を生み出させようとします。こは労働者たちが毎日、職場で体験していることです。休憩時間のカットをふくむ最大限の長時間労働、サービス残業も強要しての食うや食わずやの低賃金、最小限の人員で1人1人に濃密な労働を強制する労働強化、他の資本を出し抜くための先進的な機械の開発と採用、機械の導入による労働者の解雇などなどです。これらは、労働者にくらしの悲惨をもたらします。マルクスもたくさんこの事実を紹介し、児童労働や過労死などを告発します。

しかしマルクスの視野はそこにとどまりません。労働者

はこれらの苦難に耐えるだけでなく、進んで抵抗の取り組みを開始します。18世紀には労働組合を結成し、そこに団結した力で、それまでこの世にひとつもなかった工場立法（労働者保護立法）を議会につくらせます。現代日本の労働基準法の世界的な元祖です。剰余価値生産の拡大を追求する資本の運動は、これに抵抗し、資本の運動を社会的な合意の枠内に制御しようとする労働者の知的・組織的能力の発達を不可避とする——そのことをマルクスはイギリスでの労資のたたかいの歴史の中に見いだしています。

第6篇では「労賃」（賃金）の支払い方法が「剰余価値」の存在を見えづらくする役割を果たしていることの暴露です。賃金は労働力の価値への支払いですが、契約や法にも現れる日常の意識では労働力でなく労働に対する支払いとなつています。「労働の対価」というやつです。それによって一定の成果を生み出す労働には正当な支払いが行われているという観念が常識となり、遅くまではたราบ残業代が支払われ、多く作れば賃金が割り増しされるという現実も「はたらいた分はもらっている」というこの観念を強化します。それによって、資本家に剰余価値をもたらす不払い労働（剰余労働）の存在が見えづらくなつてしまします。実際には労働者は、資本家が支払う賃金分を超える労働の成果を生んでいます。その差額を資本家は何の支払いもなしに手にいれています。それがなければ資本には1円のもうけも生まれません。そのからくりを明らかにす

るには科学のメスが必要です。天が動くという常識の背後に地球が動く真実が隠されていたように、「労働の対価」という常識の背後に剰余価値つまり「不払労働」の取得が隠されています。本当は地球が動いているのにどうして天が動いているように見えるか——ここではそれと同じ論理の解明が行われています。

■「資本主義も変わる人間社会の一段階」■

最後の**第7篇**では、資本主義的生産の歴史とそこでの労働者の運命が探求されます。第6篇までの剰余価値論は、生産を一回限りとするものでした。しかし、実際にはそれは毎日繰り返され、競争に勝ち抜いた資本は剰余価値を資本にどんどん追加して巨大化しています。その巨大化が資本の「蓄積」です。われこそもうけるのだという資本間の競争は、資本主義の経済に景気の一時的な過熱とその結果である過剰生産による経済破綻（恐慌）との周期的な循環を生み出します。この循環のなかで、資本は景気の悪い時には労働者の解雇をすすめ、景気のいい時には雇用を増やします。ここで必要な雇用がすぐに満たされるのは、仕事を待つ失業者や半失業者の一群である「産業予備軍」がつねにプールされているからです。これが景気のよい時にも労働者の賃上げなどの要求の足を引っ張る重石として利用されます。「おまえの代わりはいくらでもいるのだぞ」というわけです。

3

〔第2部「資本の流通過程」のあらすじ〕

資本の循環・回転が成り立つ条件は

『資本論』第2部「資本の流通過程」に進みます。組み立ては次のようになっていきます。

第1篇	資本の諸変態とそれらの循環
第2篇	資本の回転
第3篇	社会的総資本の再生産と流通

ここで知っておきたいのは、じつはマルクスは『資本論』の全3部を完成させることができず、第2部と第3部はマルクスが残した草稿から、エンゲルスが編集して出版したものだということです。エンゲルスはマル

クスは終生の友人であり共同研究者でした。部や篇や章のタイトルも、マルクスの草稿をもとに、最終的にはエンゲルスが決めました。そのエンゲルスの苦労によって第2部・第3部は残されましたが、今日マルクスの草稿の全体が明らかにになったことで、エンゲルスのタイトルのつけ方や編集の適切さも、たびたび議論されるようになっていきます。以上は『資本論』研究にかかわる豆知識です。

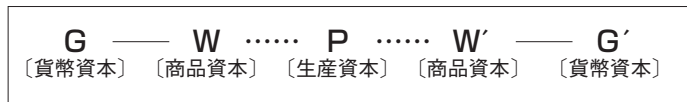
さて少しだけまとめです。以上のように『資本論』第1部の全体が示している、①資本と資本主義が剰余価値を追求するその運動が、②同時にそれへの抵抗と社会の制御に向けた労働者の発達を生み、工場立法をはじめ、未来社会への転換に必要な準備を重ねさせるという両者の関係を、マルクスは資本主義の「肯定的理解」のうちに「必然的没落の理解」を含む合理的な「弁証法」と表現しています（新版『資本論』①新日本出版社、2019年、33～34頁）。ただし訳語を一部変更している場合があります。以下引用は分冊数とページを示す。みなさんも、そこを強く意識しながら読んでみてください。

さて、内容に入りましょう。第2部は「資本の流通過程」です。資本は生産に必要な原料や労働力を購入し、それらを結合させて何かを生産し、できあがった生産物を販売します。第1部ではその購入と販売は「うまくいく」と

いうことを一方的に前提しました。そうしないと生産のみに焦点が当てられなかったからです。しかし、現実の世界を見れば、コロナ・パンデミックによる部品供給網（サプライチェーン）の寸断とか、半導体の不足で製造業が動かないとか、ファスト・フード店でフライドポテトがつかれないといったように、「うまくいかない」こともあるわけです。そのような問題を無視して話をすすめた第1部のいわば論理的な借りを返していくのが第2部となっています。

■「資本の循環と回転と絡み合い」■

第1篇では個別資本の運動を（図）のように、「貨幣資本」―「商品資本」：「生産資本」といった具合に自分の姿を変えてすすむ資本の「循環」の中で検討します。最初にG貨幣の姿で市場に登場した資本が、部品や労働力などのW商品になり―つまりそれらを買って姿を変えて―次にP生産の現場に進み、生産の過程をぬけるとクルマなどのW商品に変わり、最後にうまく販売されるとG'貨幣にもどる。そうやって資本価値が自分の姿を変えてすすむことをマルクスは「資本の変態」とよび、その一巡りを貨幣資本の「循環」と呼んでいます。後半の



WとGに「」（ダッシュ）がついているのは、生産によって剰余価値が追加され、最初に投入されたGやWより、その分の価値量が大きくなっているからです。この最初のG―Wと終わりのW'―G'がスムーズに進行しなければ資本は思うように運動することができません。マルクスはこの循環を、右の貨幣資本の循環の他に、Pで始まりPで終わる生産資本の循環、Wで始まりWで終わる商品資本の循環と、様々な角度から執念深く検討しています。

第2篇では、これを一回限りの「循環」でなく、何度も繰り返される「回転」の姿で分析します。それによって新たに見えてくるのは、最初のG―Wの中に、数年に一度、十数年に一度といった割合で機械や建物などの大きな買い物がまじりこんでくるということです。機械の買い換え、工場の改修や新築といったいつもより大きなお金が動く買い物です。つまりG―WのWの中には、毎回の生産で価値をすべて生産物に移り込ませていく「流動資本」と、何年もかけて少しずつしか価値を生産物に移転させない機械などの「固定資本」の区別があって、必要な時にこの巨大な固定資本をスムーズに購入することができること、つまりこれを買うのに必要なGが「回転」の中で確実に準備されていることが、資本の活動に不可欠な条件となるわけです。

第3篇は、個別資本の運動ではなく一つの社会で互い

に無数に絡み合う社会的総資本の運動の分析です。第1篇では資本の運動にはG―WとW'―G'がスムーズにいくことが必要で、第2篇ではそれに加えて、個々の資本が時々、とても大きな買い物をする事が明らかにされました。ある社会のすべての資本のこれらの購買が実現するには、機械などの固定資本、部品や原料や労働力などの流動資本がいつも必要なだけ販売―その前に生産―されていなければなりません。他方で社会のすべての資本の販売が成り立つには、それに必要な購買力が存在していなければなりません。

どういう条件が満たされた時に、そうした現実が可能になるのか。この問題をマルクスは、総資本を機械や部品などの生産手段の生産部門と家電や衣服といった消費手段の生産部門に大きく分け、さらにそれぞれを不変資本と可変資本と剰余価値にわけて、それらの量的なバランスを問うことで説明します。毎回の社会全体の生産量が変わらない単純再生産の成立条件を、あっさりと導きだしたマルクスも、生産量が次第に増えていく拡大再生産の分析にはずいぶん苦勞の跡を残しています。

■「安定した拡大再生産の進行からの逸脱こそ」■

さて、豆知識です。ここまでが『資本論』の第2部ですが、エンゲルスによる特に第3篇の編集には、近年いろいろな検討がくわえられています。その一つは、最後の拡大

再生産が成立する条件の文章に、余計な文章が入っているのではないかという問題です。

マルクスの草稿は、すでに整理のついたものを文章に仕上げていく原稿とは違って、考えながら書くあるいは考えるために書くという文章です。そうするとそこには、考えが整理されるだけでなく、まとまらずに途中でやめてしまったところや、思いつきにしがたがって別のテーマにとんでいくといった飛躍や断絶も含まれてきます。その読みづらい草稿をエンゲルスは編集したのですが、第2部第3篇にはマルクスが考えをまとめ切れずに途中でやめてしまった3度の挑戦の文章が、うまく最終的な結論にたどりついた4度目の文章とひとつながりのように採用されているというのです。新版『資本論』には、それら四つの文章を区別する訳注がつけられています。

もう一つは『資本論』全体のあり方にもかわる、さらに大きな問題です。マルクスは第2部第3篇を本当にいまのように、資本主義社会の全体が円滑に拡大再生産をすすめるための条件を説明することで終わらせようとしていたのだろうかということです。そうではなく、実は、資本主義が資本主義であるかぎりまぬがれることのできない景気循環―そこには過剰生産による周期的な恐慌の発生もふくまれます―の解明、安定的な拡大再生産の進行ルートを周期的に逸脱し、恐慌を繰り返さずにおれない資本主義の運動の解明こそ、マルクスが本当に書こうとしていたこ

とだったのではないかというのです。これについても新版『資本論』には、マルクス自身の文章による補足が訳注で成されています。

4

「第3部「総過程の諸姿容」のあらすじ」 具体的な社会の表面に あらわれる姿を解明

いよいよ、第3部「資本主義的生産の総過程」です。そ

第1篇	剰余価値の利潤への転化、 および剰余価値率の利潤率 への転化
第2篇	利潤の平均利潤への転化
第3篇	利潤率の傾向的低下の法則
第4篇	商品資本および貨幣資本の 商品取引資本および貨幣取 引資本への（商人資本へ の）転化
第5篇	利子と企業者利得とへの利 潤の分裂。利子生み資本
第6篇	超過利潤の地代への転化
第7篇	諸収入とその源泉

の組み立ては次のようになっています。

第3部は、まずそのタイトルが問題です。「資本主義的生産の総過程」というのはエンゲルスがつけたタイトルですが、マルクスは草稿の中で2度ほど「総過程の諸姿容」と書いています。第1部で生産、第2部で流通、第3部で総過程

というエンゲルスの書き方だと、第3部の課題は生産と流通の相互関係の検討のように読めますが、マルクスはそれは第2部第3篇で終わっており、第3部の課題は、それらが社会の表面にあらわれる姿、特に資本家の日常意識に浮かぶ具体的な姿の解明だとしています。理論的に深く掘り下げて初めてわかる世界から、誰の目にも見える日常の世界に浮上して、その日常にとらわれて行われている資本の行動を、深掘りの世界から説明してみせるということ

■「資本家の日常意識がつくる世界」■

第1・2・3篇では、資本家が自覚的にそれを追求している「利潤」の世界が検討されます。第1部では、もうけの源である「剰余価値」は労働力に投下された「可変資本」から生まれ、機械や原料などの「不変資本」は、生産物に価値を移しはするものの、新しい価値をつくることはできないことが示されました。第2部の流通論もそれを前提にした探求の世界です。しかし、資本家の日常意識には、可変資本と不変資本の区別や剰余価値の生産といった理解は出てきません。あるのはいくらの元手（前貸総資本）で、いくらのもうけを手にするかです。そうして元手全体との対比でとらえられた剰余価値が「利潤」です。

これは呼び名の違いだけではありません。利潤の最大化

が資本家の行動の指針になるからです。たとえば、同じく

月20万円で買った労働力から40万円の価値を生み出して、差額の20万円を手に入れる場合でも、資本家には月20万円の可変資本と剰余価値の比率（剰余価値率あるいは搾取率）ではなく、不変資本をふくむ元手の全体と剰余価値の比率（利潤率）が問題になります。つまり同じ搾取率なら、不変資本つまり設備投資が少ない方が利潤率は高くなり、資本はそういう部門に向かって移動するのです。

しかし、あまりたくさん資本がある部門に集まると、商品の安売り競争が必要になり、その部門の利潤率は下がってしまいます。こうした個々の資本の競争と移動の結果、社会全体に部門の違いを超えた平均利潤率がつくられます。可変資本と不変資本の比率が異なるにもかかわらず、どの部門でも平均利潤が得られるのは、可変資本の比率が高い部門で生産物は価値より安く売られ、可変資本の比率が低い部門で生産物は価値より高く売られているからです。こうして現に成立している商品の価格をマルクスは「生産価格」と呼びます。個々の資本が生産する商品の価値と生産価格は乖離し、生産される剰余価値と取得する利潤も乖離しますが、社会の全体でみると、価値の総額と生産価格の総額は一致し、剰余価値の総額と平均利潤の総額は一致しています。こうして深掘りによって発見された価値、剰余価値の世界から、資本家の日常意識がつくる

経済の表面の世界が説明されます。

なお、第3篇でマルクスは、全体としての平均利潤率の歴史的な低下の傾向が、資本主義そのものの歴史的な限界に結びつくかどうかを、特に恐慌論とのかかわりで探求しています。明快な回答を出すにはいたっていません。

■「剰余価値の分配、最終章の中断」■

第4・5・6篇では、第1部の最初からずっと登場してきた商品や剰余価値を生産する資本を「産業資本」と名づけたうえで、産業資本から商業資本、銀行資本、地主らへの剰余価値の配分が分析されます。デパートや家電量販店のような商業資本は商品を生産せず、剰余価値を生産していません。産業資本や商業資本に、貨幣を貸し付ける銀行資本も剰余価値を生産していません。しかし、商業資本も銀行資本ももうけのために活動し、実際にもうけを手にしています。それは産業資本からの剰余価値の分配によって成り立っています。産業資本は、自分よりも効率的にそれを行う商業資本に生産物の販売をまかせることで元手を節約し、資本の回転を早くすることで利潤率を高めます。

他方で、商業資本は産業資本から生産価格より安く購入した商品を、消費者に生産価格どおりに販売してその差額から平均利潤を得ていきます。それは産業資本が生産した剰余価値の一部を手に入れるということです。銀行資本は

こうした両者に貨幣を貸し付けて、もとは産業資本が生み出した剰余価値の一部を利子として、自分の手にします。なお地代というのは土地の借り賃ですが、マルクスが研究対象としたイギリスは地主が土地をなかなか売らない社会で、大きな資本でも借地に工場や建物をつくらねばならない事情があったのでした。地代もまた、その元は産業資本が労働者から取得した剰余価値でした。

第7篇は『資本論』全3部のしめくりです。ここには、資本主義を越えた未来の社会で労働時間（必然の国）に対する自由時間（自由の国）の比率が増し、それが人間各人の能力を大きく発達させ、さらに労働時間を短縮させる好循環を生むといった話や、資本から利潤が、土地から地代が、労働から労賃がそれぞれ別の源泉から生まれるのだという日常意識のニセ学問化でしかない俗流経済学への批判、さらには経済の枠内にとどまらないマルクスの社会理論の基本概念を論じた箇所など重要な文章がふくまれています。しかし、全体としてはまとまりが悪く、文章も最後の第52章「諸階級」を書き始めたところで中断しています。

さて、第3部についての豆知識です。なぜ第7篇がまとまっていないかにも直接かわる問題ですが、じつは『資本論』全3部は、第1部から順に書かれたものではありません。実際には第3部の草稿が、全3部の中でもっとも早い

時期のもののなのです。そのあたりを整理するために、節をかえて『資本論』の成立にかかわる歴史を少し見ていきます。

5

『資本論』成立の歴史をめぐって

■「第2部第1草稿での理論的転換」■

1818年に生まれたマルクスは、1848年『共産党宣言』を書いた直後にドイツのブルジョア革命に参加します。しかし革命は敗北に終わり、1849年以後マルクスは亡命先のロンドンで終生をすごすことになります。

1850年、革命で中断していた経済学の研究を大英博物館で再開し、7年の研究の後、1857～58年に初めて経済学の草稿を書き上げます。例の書きながら考え、考えるために書くという文章で、多くの飛躍や断絶をとまなう文章です。3年後の1861～63年には、二つ目の大きな草稿も書きました。

その上で1863～64年、ついに『資本論』第1部の初稿を書き上げます。これは本として出版するための原稿です。ただし、マルクスはすぐにこれを仕上げようとはしませんでした。『資本論』全体が一つの「芸術的な全体」だから、全体が完成されないうちに一部だけを出すわけにはいかないというのです。実際、同じ1864年、マルクス

は第3部前半（第1～3篇）の草稿に取り組みます。

そこに一つの事件が起こります。1864年に国際労働者協会（インタナショナル）が創立され、マルクスにその指導的な役割が求められたのです。様々に考え方の異なる労働者組織の集まりを「労働者の解放」をめざすものとして鍛えたマルクスは、1872年までこの重責をはたし、協会は最終的に1876年に解散します。この経験は『資本論』の内容に大きな刺激を与えるものになりました。

多忙の中、マルクスは1865年に書いた第2部の第1草稿で、第2部第3篇の豆知識（15頁）でふれた恐慌の運動論にかんする新発見にたどりつきます。ここでマルクスは、恐慌を資本主義の末期現象だととらえたそれまでの資本主義観を、恐慌をふくむ景気の循環は資本主義のごく日常の生活行路であり、恐慌を資本主義の歴史的危機に直結させる革命論も誤りであると大転換しました。革命論の領域では、ここから労働者の知的・組織的発達をとまなう、多数者の合意にもとづく資本主義の段階的な変革論が本格的に探求されるようになり、それまで考えられていた『資本論』の構成も大きく変化することになりました。

つづいて、同じ1865年に第3部後半（第4～7篇）の草稿が書かれますが、特に第4篇で新しい恐慌論がより具体的に展開され、恐慌を資本主義の危機に結びつけることを模索した第3篇までとは理論の地平が変わっています。

翌1866～67年、マルクスはついに『資本論』第1部の単独での出版に向けて完成稿を書きますが、1864年までに書かれた初稿は大幅に修正され、国際労働者協会での実践にも刺激されて、特に資本の横暴に抵抗し、資本の運動を制御する社会的な力を身につけていく労働者の発達論を大幅に拡充していきました。さらに1867年の出版の後も1872～75年のフランス語版による大幅な改訂など、マルクスは第1部の充実をつづけます。

しかし、先の第1草稿をふくめて八つの第2部草稿を残しながら、第2部、第3部を完成させることのできないまま、マルクスは1883年に亡くなります。

その後、第2部、第3部の編集はエンゲルスによって行われました。しかしエンゲルスは第2部第1草稿を第2部の編集にまったく利用せず、その結果、恐慌の周期的な発生をめぐる運動論の問題が第2部のどこにも入らなくなっていました。

第3部についても、恐慌は資本主義の末期症状でそこから革命が起こるという見通しを前提にした前半の草稿、特に第3篇の「利潤率の傾向的低下」をめぐる議論と、それを大きく転換した後に書かれた第4篇以降の草稿が、何の注釈もなく一続きの書き物としてまとめられることになりました。第3部の草稿は1864年と65年の前後半一つずつしかありませんから、それをもとにするしかないわけ

すが、エンゲルスが第2部第1草稿でのマルクスの理論的飛躍に気づけなかったこともこうした編集の大きな要因となったでしょう。第3部後半の第5・6篇の草稿は内容がまったく未整理でエンゲルスは編集にとっても苦勞しました。これが未整理だった最大の理由は、両者が第2部第1草稿をきつかけとした構想の変化によって初めて『資本論』に組み入れられることになったということです。

こうして第3部は、65年の理論的転換以前の古い理論を前半部分に残し、またもつとも未整理な篇を後半部分に含む、『資本論』全3部の中でもつとも若く未熟な部となったのでした。このように、『資本論』全3部はおおよそ第3部、第1部、第2部の順に書かれています。

■「マルクスは何を明らかにしようとしたか」■

さて、ここまで全3部のあらすじをながめたところで、マルクスがたどりつこうとした『資本論』の目的をあらためて確認しておきましょう。これについては『資本論』第1部初版の「序言」にマルクス自身がこう書いています。

「私がこの著作で研究しなければならないのは、資本主義的生産様式と、これに照応する生産諸関係および交易諸関係である」(①11頁)。ここで「交易」と訳されているのは、経済的な交換や貿易のことではなく、生産をめぐる関係にとどまらない政治や法などより広い範囲の人間関係を

表した言葉です。

「資本主義的生産の自然諸法則から生ずる社会的な敵対の発展程度の高低が、それ自体として問題になるのではない。問題なのは、これらの諸法則そのものであり、鉄の必然性をもって作用し、自己を貫徹するこれらの傾向である」(①11～12頁)。

「たとえある社会が、その社会の運動の自然法則の手がかりをつかんだとしても——そして近代社会の経済的運動法則を暴露することがこの著作の最終目的である——その社会は、自然的な発展諸段階を跳び越えることも、それらを法令で取りのぞくこともできない。しかし、その社会は、生みの苦しみを短くし、やわらげることはできる」(①14頁)。

ここでは『資本論』の目的が二段構えで書かれています。近代資本主義の「経済的運動法則を暴露することがこの著作の最終目的である」。ここはわかりやすいところですが。その法則に、資本主義の均衡や繰り返しの法則だけではなく、それをつうじた歴史的な発展や変化の法則がふくまれるだろうことは、『資本論』のあらすじを読んできたみなさんにはすでに明らかなことでしょう。しかし、マルクスの説明はそこで終わりません。では何のために経済的運動法則の暴露をめざすのか、それは労資の「社会的な敵対」——それが労働者の貧困や苦難や闘いを生み出すわけ

ですが——を解消する新しい社会の「生みの苦しみを短くし、やわらげる」ためだということです。

これらの説明には資本主義のくびきからの労働者の解放のために具体的に行動するアクティビストであり、またそうだからこそ「資本主義的生産の自然諸法則」を誰よりも正確にとらえる徹底したサイエンティストであらうとしたマルクスの立場や姿勢がよく表れていると思います。『資本論』のあらゆる魅力は、何よりここに端を発しているのではないのでしょうか。

6

環境破壊、気候危機をとらえる視角

■「人間と自然の物質代謝の攪乱」■

『資本論』の魅力は、すでに紹介した「あらすじ」で尽くせるものではありません。それぞれのあらすじの精緻な展開に、おどろくほど内容豊かな論点が散りばめられています。たとえば人類の未来を大きく左右する環境破壊の問題について、『資本論』はすでに次のように問題の根源と解決の方向を示していました。

まずマルクスは第1部第3篇で、人間の労働一般を「人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」(②310頁)と規

定します。「物質代謝」というのは、生命体と外的自然の物質のやりとりを指した言葉ですが、ここでは人間が労働によって自然を加工し、その生産物を消費し、廃棄する過程までをふくめてそう呼んでいます。

しかし、資本主義はその労働過程を剰余価値の追求に従属させる社会です。そこで第4篇で大工業を分析したマルクスはこう書かざるを得ませんでした。資本主義は都市の人口を増加させ「人間と大地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地豊度の永久的自然条件を攪乱する」(③881頁)。大工業の発展による都市と農村の分離が、それまでの物質代謝のバランスを大きくかき乱しているということです。

では、その攪乱の原因は何なのか。「資本主義的生産は、すべての富の源泉すなわち大地および労働者を同時に破壊する」(③882頁)。マルクスはそれを資本による無分別な利潤追求だと指摘します。ここでは資本主義的生産による大地の破壊が、過労死や教育から切り離された児童労働者の無教養など、多くの事例をともし人間の破壊と同等に重視されています。

■「合理的・人間的な再建を進める道」■

ただしマルクスは、それによって人間社会がただちに衰

退に向かうとは考えません。資本主義は「あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また十分な人間の発達に適合した形態において、体系的に再建することを強制する」(③882頁)。この社会による「強制」に依って、人間は資本主義の欠点を乗り越える新しい社会に進むと考えたのです。

ですから第3部第7篇での未来社会の説明に、マルクスはこうも書きました。

「この(生産の)領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行うこと、この点にだけありうる」(⑫1460頁)。

資本のくびきを免れ、互いに自発的に結合しあうようになった生産者たちは、経済にかかわる人間関係を平等な形に再編するだけでなく、自然との物質代謝をもみずからの人間性(人間的自然)に適合する形に制御していくというのです。

さらに、この文章の直前でマルクスはこう書いていまし

で体系的な再建も、資本主義内部での取り組みによって準備されるものとなります。

たとえば石炭火力発電の廃止などCO₂排出の実質ゼロを資本に求め、「グリーン・ニューディール」など人間と自然の合理的な物質代謝を具体的な社会論としても探求するにいたったストックホルム会議(1972年)以降の人間社会の努力は、つねに目前の課題の達成に向けて重ねられたものでした。しかし同時にそれは未来社会におけるより根本的な再建の準備となり、問題の解決に挑む多くの人の能力を発達させるものとなっています。この努力と成果を否定するのではなく、科学の成果にもとづいて一層発展させることこそ現代社会の求めであり、マルクスその人の言葉が語った道となっています。

7

若い研究者たちにとっての魅力

他にも『資本論』には、ぼくが関心をもって書いたものだけでも、資本主義社会のジェンダー視角からの分析や「途上国」での人口爆発と「先進国」の少子化にかかわる文章など多くの刺激的な論点をふくんでいます。ぜひペー

た。「未開の人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない、しかも、すべての社会諸形態において、あらゆるすべての生産諸様式のもとで、彼は、そうした格闘をしなければならぬ。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するから、自然的必然性のこの国は拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する」(同右)。

こうして経済発展の停止や脱成長ではなく、人間と自然の関係をより人間的なものに転換(生産力の質の転換)する中で生産諸力を発展させることは、マルクスによるコミユニズム論の重要な内容の一つとなっています。それは日本をふくむ世界の貧困の解決にも、人間の多面的で個性的な発達の「根本条件」となる「労働時間の短縮」にとっても不可欠です。また、こうして促進される人間諸個人の発達は、さらに人間的で合理的な物質代謝(生産力の量と質の発展)を可能にするという社会発展の好循環をつくっていくと考えたのでした。

補足しておけば、物質代謝の体系的な再建を未来社会に期待したマルクスは、そのための努力も未来に先のぼししたわけではありません。マルクスは資本主義内部でのたたかいこそが、資本から労働者を解放する社会を準備すると考えました。同様に、未来社会における物質代謝の合理的

■■『資本論』研究会での感想から■■

最後に『資本論』に取り組みはじめたばかりの若い研究者の感想を紹介しておくことにします。2年ほど前からオンラインで、毎月1回2時間半くらいのペースで新版『資本論』を読んできました。参加者は現在30歳前後で、2015年の安保法制に反対する取り組みで活躍したいわばSEALDs(シールズ)世代の5人と、ベテランの哲学者とばかりの7人です。今回、事前に感想を寄せてもらいましたが、若いみなさんの一言一言が現代に生きる『資本論』の多面的な魅力を語るものになっていると思います。

社会政策や労働社会学を研究しているAさんは、資本主義の様々な現代的問題を、本質に立ち返って考えるための理論的指針を『資本論』が提供してくれると実感しています。例えば日本型雇用システムの下での「年功賃金」と呼ばれる慣行や、最低賃金の水準を学生たちに語ろうとする時、どうしても「そもそも賃金とは」「その水準はどうやって決まっているか」といった問題を語らずにおれなくなる。そして、そこをさらに掘り下げると「労働力の価値とは」といった問題に立ち返らざるを得なくなる——そのように現代資本主義の根本の問題あるいは問題の本質を『資本論』は教えてくれるし、考えさせてくれるとのことでした。

政治学や社会運動論を研究しているBさんは、いわゆる経済学畑の人ではありません。しかし、たとえば第一部第8章「労働日」の最後に描かれた、労働者階級による政治闘争の重要性の箇所が非常に興味深く読めたそうです。社会の変革が、なにか一度の革命的な出来事によってではなく、継続的で地道な政治闘争の先に起こるものだということを考えさせられた。さらにマルクスがどういう景色を見て、どのような思考で『資本論』を書いたのか——そこを理解することで、われわれも現代の景色からどういう理論をつくる必要があるのかを学ぶことができるのではないのか、その点を意識してこそ現代社会を『資本論』とともに分析し、変革の道筋を考えることができるのではないかと語ってくれました。

ジェンダー論を研究するCさんは、現代社会における性差別の構造と資本主義経済の運動法則がどのように関わっているのかを考えたいと『資本論』に取り組んだそうです。そして読み進めるにつれ、資本主義が労働者の生活や生存をいかに苛烈に脅かし、その中で性差別がいかに維持され活用されているかという構図が見えてきたといいます。性差別解消のために労働問題に取り組む必要性を強く感じ、またその中で、ケアしたり、ケアされたりすることを労働者が権利として要求すること——そうした課題を労働者の運動に落としこむことが必要だとも語ってくれました。

いかがでしょう。研究の領域や問題意識のあり方に応じて、それぞれに引きつけられる論点はまったく異なりますが、裏を返せば、そこに『資本論』の尽きせぬ魅力が示されているのではないでしょう。

■「線を引き、書き込み、「わかる」を増やしていく」■

さて、そろそろ話を閉じることにしていきます。そうはいっても『資本論』はむずかしい、長すぎる。そういう声も聞こえてきます。そのとおりですね。とてもスラスラ読めるしろものではありません。それでもなんとかかじりついていこうとすれば、モチベーションを維持するしかけが必要です。各地で学習協などが実施している定期的な講座に参加する、あるいは仲間うちで読書会をつくっていく。そのようにして自分の意欲とペースを維持してください。

忙しくて読めないという声は、日本の労働条件を考えるとはんとうに切実です。しかし『資本論』を読んでいるのはヒマな人ばかりではありません。忙しく市民運動や政治活動に取り組んでいる人、同じく毎日走り回っている学者や学生たち、むしろそうした人たちが時間が惜しんで読んでいます。マルクスは「時間は人間発達の場だ」といいましたが、そうであれば時間はつくるしかありません。労働時間の短縮に取り組みながら、しかし、今のような条

た。資本の論理にゆだねることのできない人間のニーズや人間自身の尊厳に目を向けることの大切さも実感させられているそうです。

社会学や科学論を研究するDさんは、剰余価値論を読みながら、現代日本の労働時間や労働強度の問題と未来社会における労働のあり方の変化を、人間の本質的なニーズとのかかわりで議論したことが印象的だったといいます。人間の生存に必要なニーズを満たしていくことと、現代の地球環境の限界という問題の關係に「すわりの悪さ」を覚えていたが、その關係を考えていく上での示唆を得た気がすると語ってくれました。

法学、労働法を研究しているEさんは、商品論の中で、マルクスが中世ヨーロッパでは「人格的依存關係」が社会的基礎をなしていると指摘しているのを読んで、資本主義社会の歴史的な位置がより鮮明にとらえられるようになったそうです。また交換過程論の冒頭部分に、現代の法学で必ず学ぶ近代法の原則——権利能力平等の原則、所有権絶対の原則、私的自治の原則——が登場するが、それを紹介するだけでなく、なぜそれが原則になるのかという理由が示されており、そこにマルクスの社会分析のすごさを感じたとのことでした。さらに工場立法に見られる労働法の問題だけでなく、消費者保護や生産者責任など現代の法にかかわる論理が見られるところも面白いとのことでした。

件下でも、なんとか諦めないで時間をつくる。そこは覚悟と工夫の問題です。

読んでもわからない、すぐに忘れてしまうという声もよく聞きます。そのとおり人間は誰でも忘れます。学者だっけと同じです。だから本を読んでいるその最中に、大事だと思ったところに線を引き、印をつけ、考えたことや疑問に思ったことを欄外の余白に書き込むのです。書いておけば、一度はきれいに忘れたことでも、読み返した時に思い出すことができますから。

本は開いて見ているだけでは何もわかりません。ペンをもって、どこが大事だろうか、何がいたいのだろうか、この言葉の意味はどこで説明されているだろうかと、こちらから読みにいかなければならないものです。それでもわからないところだらけかも知れません。そうだろうと思います。ほくも今でもそうですから。その点については、わからないから諦めるのでなく、わからないことの中に少しでもわかるところを見つけたし、それを少しずつ増やしていく——そういう構えをもつしかありません。

こんな多くの文章を、最後まで読めたあなたはすでに十分大したものです。次はぜひ『資本論』そのものに挑戦してください。